

第9回 BACHスクリーンコンサート 2022. 1月

1月のテーマ ニューイヤーコンサート

毎年1月1日にウィーン楽友協会の大ホール（黄金のホール）で行なわれる昼公演のコンサートがよく知られ最も有名な演奏会です。1939年が始まりだといひます。ヨハン・シュトラウス2世を中心とするシュトラウス家の楽曲が主に演奏されます。

国内のオーケストラは12月の第9に引き続き1月のニューイヤーコンサートは恒例化しています。演奏曲はワルツ、ポルカ、ギャロップなど、とても軽快で楽しい曲です。



1、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団

(1)コペンハーゲン蒸気機関車 (ハンス・クリスチャン・ロシビ)

『コペンハーゲン蒸気機関車のギャロップ』は、列車が駅から走り出して次の駅に停車するまでを忠実に音楽的に再現しています。

(2)鍛冶屋のポルカ (ヨーゼフ・シュトラウス)

弟ヨゼフが1869年に金庫メーカーのヴェルトハイム商会から、耐火金庫2万個の製造を記念して作曲してほしいという依頼を受けて作った曲です。高温に熱した鉄を鍛えるために使う金づちと金床を打楽器として使用し、オーケストラの優雅な音の中に、本物の金づちと金床が発した「キーン」という音がホール中に響き渡るの、ものすごいインパクトです。

(3)カルメン・カドリーユ (エドゥアルト・シュトラウス1世)

ビゼー作曲のオペラ「カルメン」をわずか5分弱の作品にまとめたのが、この「カルメン・カドリーユ」です。

(4)バレエ音楽「眠りの森の美女」(チャイコフスキー)

チャイコフスキーが作曲した三大バレエ音楽の一つ

(5)ピツィカートポルカ (ヨハン・シュトラウス2世)

弦楽器のピツィカートだけで演奏されるユーモラスな曲で、中間部のトリオでは鉄琴が加わる。

(6)ペルシャ行進曲 (ヨハン・シュトラウス2世)

ペルシャ(現在のイラン)の国王ナーセロッディーン・シャーに捧げられた曲だと言われています。

(7)ポルカ燃える恋 (ヨーゼフ・シュトラウス)

ヨハンシュトラウスは、ウィーンに残してきた愛する妻カロリーネのことを想い、離ればなれになってしまった切なさや深い愛情を表現した曲です。

(8)ワルツ「うわごと」 (ヨーゼフ・シュトラウス)

医学舞踏会でヨーゼフに依頼された曲の題名は「うわごと」。ヨーゼフは憂鬱な序奏から軽やかなワルツへの展開が絶妙で、非常に人気の高い作品です。

(9)ポルカ「雷鳴と電光」 (ヨハン・シュトラウス2世)

遠雷を思わせる大太鼓のトレモロが響き、中間部のトリオでは稲妻と雷鳴がけたたましく交錯しながら主部に戻り、瞬く間に曲は終わる。大太鼓で雷鳴を、シンバルで稲妻(または電光)を思わせ、雷鳴と稲妻を巧みに模写している。

(10)チック・タック・ポルカ (ヨハン・シュトラウス2世)

シュトラウス2世は、『こうもり』の中のメロディを用いてワルツ1曲、ポルカ3曲を編曲した。この『チックタク・ポルカ』はその中のひとつです。

(11)美しき青木ドナウ (ヨハン・シュトラウス2世)

ウィーンフィル・ニューイヤークンサートではアンコールの定番となっています。作曲家であるヨハン・シュトラウス2世は、父1世と同じくウィンナワルツの作曲家として知られています

(12)ラデッキー行進曲 (ヨハン・シュトラウス1世)

ヨハン・シュトラウス1世が作曲した行進曲。北イタリアの独立運動を鎮圧したヨーゼフ・ラデツキー将軍を称えて作曲された。

毎年プログラムのアンコールの最後の曲として、必ず演奏される曲として知られています。曲中に観客の手拍子が入ることで有名だが、慣習であり、作曲家自身の指示などがあるわけではありません。

2、ボレロ 作曲者 モーリス・ラベル フランス 15分

ボレロは約15分間の演奏中ずっと同じリズムと2種類のメロディーが繰り返されています。同じリズムが最初から最後まで延々と繰り返されという独特の音楽です。

小太鼓が、タン タタタ タン タタタ タンタン、タン タタタ タン タタタ タタタ タタタのリズムを最初から最後まで打ち続け、一定のリズムで刻まれる心臓の鼓動のように、繰り返されます。フルートから始まりクラリネット、ファゴット、オーボエと順番に木管楽器が淡々と続き、金管楽器が加わります。弦楽器はピツィカート(玄をはじく)でしばらく演奏し、弦楽器は10分経過した頃から、そして全楽器が鳴り始め、次第に音量が大きくなっていきます。

これがラストで突然転調し爆発して勢いが加速する時、それまでの一定の安心感から解放されるとともに鳥肌の立つような興奮を身体の奥底から感じると思います。

単調な曲ですが、音量と音厚が次第に増大していく魅力的な曲で、終わったあとスッキリとするでしょう